

アコースティックバンド「テノヒラ」のボーカル 愛南町出身のkikuさんが綴るふるさとエッセイ

—あいなん音故地新—

「想像する」

「想像力」、あることをきっかけにこの力の必要性を考えるようになった。

あたしたちは他人の痛みを1寸の狂いのないまま、感じとることはできん。例え同じ経験をしてても。その人の生い立ちやその時の環境で痛みの度合いも種類も変わる。まったく同じ人が存在せんようにまったく同じ痛みもない。目の前で大切な人が痛みを抱えて苦しんどるとき、あたしたちは想像する。自分の経験してきた痛みや苦しみを足したり掛けたりしながら。

それと同じように仕事の時でも想像力を使う。あたしは何を求められとるんやろう、何をすれば円滑に運ぶやろう。資料を作る時、どうすれば見やすいか、どうすれば分かりやすいかを考える。手に取った人のことを想像しながら。

こんなことを考えるようになったのは会社で役員を務める友人からの相談やった。“社員はみんないい人。与えられた仕事はきちんとやってくれる。ただ、それ以上が望めない。”つて。結局あたしは解決できるような答えは出せんかったんやけど、その時に「想像力」について考えるようになった。人を思いやることの根本にあるのは「想像力」。これが豊かであれば、人間関係が豊かになる。そして、いつか書いた「豊かな人生」につながっていくんやと思う。(テノヒラkiku)

愛南町ふるさと親善大使を務めるkikuさんより、「4月に晴れて、はり師・きゅう師となりました。応援してくださった皆様、ありがとうございました」というメッセージが寄せられました。今後益々の活躍を祈念いたします。

あいなん物産探訪 その②

「媛っこ地鶏」

株式会社ローカルスタンダード

代表取締役 吉田 ^{ひろふみ}裕史さん



があること」。現在1,400羽ほどを一度に飼育しており、「数が増えると病気やストレスなど難しい部分が出てくるが、それを一つずつクリアしている」と苦労を話す。



こちらから愛媛CATVの動画がご覧いただけます

媛っこ地鶏は愛媛県養鶏研究所が開発した地鶏で、早く大きく成長し、肉質が良いと評価されている。町内には2軒の媛っこ地鶏養鶏農家があり、そのうちの1軒、吉田^{ひろふみ}裕史さんは9年前から緑地区で飼育を行っている。きっかけは「美味しい鶏肉を自分が食べたかったから」という。

養鶏研究所から28日齢の雛を仕入れて、出荷するまでの100日間ほどを自身の養鶏場で飼育する。餌には特にこだわっており、町内産の飼料米や豆腐屋さんからいただくおからなどを使っている。

媛っこ地鶏の特徴は「くさみがなく、歯ごたえ

販路は個人向けが中心だが、町内の飲食店や産直市にも出荷しており、「これからはもう少し手間をかけて、より品質の良い鶏を育てていきたい」と意欲は十分だ。

